



首都大学東京×スクラム釜石
釜石ラグビー2019
応援プロジェクト

第1回 「ワークショップ」 報告

2018/07/21

「第1回 ワークショップ」

7月21日（土）、来年のラグビーワールドカップ（以下、RWC）2019に向けた首都大応援プロジェクトの「第1回 ワークショップ」を新日鐵住金代々木研修センターにて、実施しました。

来年、いよいよRWC2019がこの日本で開催されます。前回のRWC2015では、日本代表が南アフリカから大金星を勝ち取り、世界の注目を浴びました。今大会では、日本代表の活躍のみならず、日本を舞台に世界各国の強靱なラグーマンがどのような試合を繰り広げるのかに期待が高まっています。

ボランティアセンターでは、この4年に1度、いや、「一生に1度の機会」に、RWC2019を盛り上げるために応援プロジェクトを立ち上げました。

今回のワークショップでは、8名の学生が参加し、RWCや釜石についての話を聞いたうえで、自分たちにできることのアイディア出しをしました。

ファシリテーターとして、NPO法人スクラム釜石理事の早川弘治さんを、ゲストスピーカーとして、公益財団法人ラグビーワールドカップ2019組織委員会 レガシープログラム担当の寺廻健太さんをお招きしました。

・応援プロジェクトについて

首都大独自のラグビー応援プロジェクトでは、NPO法人スクラム釜石と提携し、東日本大震災で被災した岩手県釜石市を応援します。

釜石市は「鉄とラグビーと魚の街」と言われており、特にラグビーは街の文化として根付いています。かつて、新日鐵釜石ラグビー部（現：釜石シーウェイブス）は、日本選手権7連覇の偉業を成し遂げました。

今回、スクラム釜石をはじめとした釜石ファン、ラグビーファンの思いが届き、RWC2019の会場の一つに「ラグビーの街 釜石」が選ばれました。

RWC2019の機運醸成と釜石の復興を目指し、「首都大生には何が出来るのか」を考えるとこからスタートし、活動していきます。

・第1回 ワークショップ

ワークショップでは、まずスクラム釜石の早川さんから岩手県釜石市についての説明がありました。釜石の産業の始まりから、かつての新日鐵釜石ラグビー部の活躍、RWC2019の会場となる鶴住居復興スタジアムの建設風景まで、詳し

く話してくださいました。学生たちは、訪れたことのない釜石という街の雰囲気や歴史をある程度捉えることができたようです。

・RWC2019とボランティア

RWC2019組織委員会の寺廻さんからは、大会概要や8月19日にキックオフイベントとして行われる「釜石8.19 釜石鶴住居復興スタジアムオープニング DAY」についてお話ししていただきました。また、学生からの質問にも丁寧にお答えいただきました。ラグビーを知らない学生にもRWCの魅力が存分に伝わったことと思います。

寺廻さんにお答えいただいた質問の一部を紹介します。

Q.RWCを釜石で開催することについて、地元住民の方はどう思われていますか？

A.最初は、「ラグビーどころではないのではないか」という声もたしかにありましたが、中高生などの若者を中心に、世界の人をお迎えしようという機運が高まり、今では多くの人が開催を喜んでおられるように思います。

Q.ラグビーを知らないで、ボランティアできるか不安です。

A.国内外からラグビーを観に来る人に対する「迎えるマインド」と「RWCに自分が参画しているというプライド」があれば大丈夫です！

・釜石での活動に向けて

最後に、「釜石RWCでボランティア活動をするために、知っておいた方がよさそうなこと」「8.19イベントまでに、自分たちにできること」をテーマにグループで話し合いました。

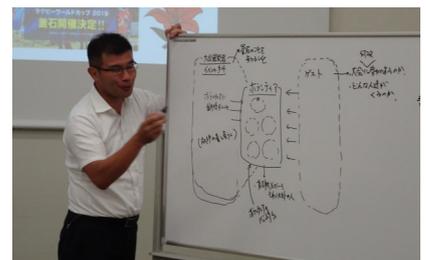
- ・釜石の歴史を知る
 - ・釜石シーウェイブスの歌を覚える
 - ・参加メンバー間で交流する
 - ・ラグビーの動画を見る 等
- 各グループの話し合いから、様々な考えが生まれました。

自分たちがどのような内容のボランティア活動をするのかについては、当日にならないと分からない部分も多いかもしれませんが、「東京でもできること」、「今できること」から、一人ひとり各々で取り組んでいきます。



RWC2019組織委員会の寺廻さん

高校では全日本高校選抜の主将を務め、大学では清宮監督のもとで、同期の五郎丸選手たちと大学日本一を成し遂げた寺廻さんだからこそ知る、ラグビーの魅力やRWCを日本で開催することの意義等を学生に向けて話してくださいました。



スクラム釜石の早川さん

釜石には、RWCを観に来る海外の方と交流するために頑張って英語を勉強している中高生がいるなど、若い世代の大会への関心が高まっているという話が印象的でした。



釜石RWCに向けて、自分たちにできることを話し合い、発表しました